

研究

毛利高政と石川水曾氏の関係

そして善教寺の移建におよぶ

東京 御手洗 一而

はじめに

「慶長八年 夫人水曾氏、信濃高島城守伊予守水曾
政昌の二女、母予を佐伯の生み、勤八郎と称す。初
めて夫人の教あり。」

「寛永十三年十二月十一日、石川康長卒し兼願院と
稱す。後田に葬り墳墓を設けず。乃ち善教寺の堂宇
を移して其の上を建つ。」

以上は、水曾氏と石川氏について、「鶴藩略史」に記
された記事である。すでに前記が事項であり、簡単に読
みずとせば何でもない事柄であるが、高政公と水曾一族
石川一族との関係は、天正十三年以来の長いつきあい
がある。

さらに「佐伯市史」は
「佐伯藩がなせ康長の墳墓をつくらずかつたか、その
理由不明瞭でない。むかし、埋葬地の上はそれまで古
市村にあつた善教寺の堂宇を移建したことは何か意
味があるようだ。」

と、善教寺の移建について疑問を投げかけている。
今回は高政公と水曾一族にかかわる縁を年代順に追

なから、おわせて善教寺移建にも及んで考えてみたいと思

う。

疑問解明の一助にでもなればと願っている。

天正十年六月三日、織田信長が本能寺でおえなさい最期
をどける。秀吉は高松城からとつて返し、山崎の合戦
で北秀を敗り、翌年一年四月織田の重臣柴田勝家と戦
岳が、北の庄に追い滅してしまふ。秀吉の天下統一への
野望が始動する頃である。織田の重臣は必ずしも心快く
思つてはなかつたが、東國の雄徳川家康もまたその一人
であつた。しかし、家康は勝運の轉流はのつた秀吉との
対決を避け、とり敢えず織勝祝賀の使いを秀吉へ送つた。

その使者を勤めたのが徳川の老臣石川康正である。兼
正は康長の父であり、以後主として秀吉方との外交接衝
に当たることになる。この特使は、近江の坂本城で秀
吉に謁見し、敬待されている。

秀吉の近習として側仕に仕えていた高政は、この徳川の
使者と初めて対面したかもしれない。

その後西雄並び文を、秀吉と家康の確執は、表面上
はともかく、織田信雄を介して、小牧・長久手へのつば
競争をいよいよ進むが、秀吉の信雄懐柔作戦が功を奏し、家
康とも身心の和議を成立させる。そして、家康は二男秀
康と秀吉の養子として大坂に送るが、この大坂を仰せつ
かつたか石川康正である。康正はしばらく大坂に滞在
し、明けて天正十三年の正月、有馬の湯治先で催された
大茶会には、一番先に招待されて好遇されている。康正
は強硬派の酒井忠勝らと違つて、秀吉にもうけが良かった

たのであらう。

その朝、秀吉はこの教正から家康方の内幕を探らうとし、教正のとりこみと計る。秀吉の掌套手段である。そして、秀吉の宣伝や風評にたえ切れず、教正は遂に秀吉方にははしるようになるが、逆に家康が秀吉方に教正を送りこんだという説もある。いずれにしても、両雄虚々実々のかけ引きがあったことだけは確かである。

二、木曾義昌の動向

木曾氏はその名の通り、累代信濃木曾を領し、高島城の城主であった。木曾は甲州信濃から天下を望んだ武田方の最先鋒として、駿河・三河・尾張・美濃に據する要所に位置していた。そのため、木曾義昌は信玄の娘をめとり、血縁關係から同盟を結び、武田陣營の橋頭堡を築いていた。しかし、信玄亡きあと様想は一変する。勝頼の代になつて、信長・家康連合軍との長縁の鉄砲戦は有名であるが、とにかく南から侵攻さうけることになつた。その間、裏面では武田・北条、北条・徳川の連合がけ引きはあつたものの、近畿予突に心血を注ぎ、天正八年、石山合戦で水鏡寺を降した信長は、予先を武田方へ向ける。

「信長公記」によると、この頃勝頼の課役は民衆を苦しめ、「内心では信長の領國になりたいと人々日願つていゝ」と記されている。

こんな状態下で、ついに勝頼に見切りをつけた木曾義昌は、ひそかに信長に通じ、信長勢を嚮導する。信長は包圍作戦をとり、わずか一か月の短期間で、一撃に甲州平定を成功させる。天正十年三月のことである。義昌はこの輪功行賞により、安曇・筑摩の二郡を与えられたが、こゝ三州後、信長が本能寺でたおれると、信濃は再び戦

乱の巻と化した。

義昌が信長から預かつた深志城は、いち早く北信濃から進出した上杉景勝に奪われ、七月には、かつて武田氏によつて木曾を逐われた小笠原長時が三男貞康がこの地を回復し、深志城はこの時松本城と改められる。

この頃から家康と秀吉の対決が始まるが、家康は南から信濃侵入を開始し、岡崎城主であつた石川教正は、保那谷を通じて諸將を幕下に招き入れる。西からは秀吉勢の浸透が始まり、木曾義昌は秀吉方について、徳川方の小笠原勢と交戦を続けることになる。

三、高政と石川・木曾両氏の邂逅

天正十三年、家康は再三にわたる秀吉の入京催促にも応ぜず、西雄の対決は決定的となる。この年の暮れになると、徳川・豊臣の接衝を勤めていた教正は、岡崎城内の不評をかつていたたまれず、前記した通り、ついに秀吉方にはしるようになる。家康は直ちに岡崎城へ走り、教正準備のため城の修繕を始めるが、期を一にして、義昌と秀吉を頼つて大坂城入りとする。

「三河物語」によると、「天正十三年乙酉の暮に、石川伯耆守逆心をし、女子を引つれて岡崎より引のける」とある。南信濃を通じて、秀吉方の義昌と家康方の担当者があつた教正は、相通じていたのかも知れない。秀吉の親物を懐柔作戦があつたとをなげればならぬ。

とちがれ、秀吉は一族を厚遇し、和泉國に十万石をよせた。その交渉係は誰が當つたか定かでないが、一族の大坂入りと教正は誰が當つたか定かでないが、一族成して、大坂城に近い和泉國にいてゐる。内訌者一族に對する延遇と監視は表裏一体のものである。秀吉は、

